

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 7 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K03526

研究課題名(和文)「政治的なもの」の理論の再構築：批判的営為の位置づけ

研究課題名(英文) Reconstructing a theory of "the political": Political theory as a critical activity

研究代表者

乙部 延剛 (Otohe, Nobutaka)

大阪大学・法学研究科・准教授

研究者番号：50713476

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：「政治」と区別された「政治的なもの」という概念は、かつて政治理論で頻りに論じられてきたが、2000年代以降、この概念への関心は低下してきた。だが、「政治的なもの」の理論はもはや無効あるいは困難なのであろうか。このような問に立ち、本研究では、「政治的なもの」の理論の可能性を、過去の著作の検討、他の有力な政治理論・政治哲学の潮流との比較を通じて検討した。その結果、明らかとなったのは以下の2点である。(1) 政治の動態を発見し把握するという「政治的なもの」の理論の意義は今なお有効である。(2) 他方、「政治的なもの」の理論は、自身の理論の正統性をより明確にする必要がある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

政治学で論じられる「政治」は議会等の制度内でのやり取りや、国家間の政治を中心的に扱うが、これは日常的、一般的な「政治」の理解とは微妙に食い違う。なぜなら、後者においては、広範な人間関係における「政治」や、あるいは制度化される以前の人々の対立などを含むからである。政治理論において、政治学上の「政治」に当てはまらないような要素はしばしば「政治的なもの」と呼ばれる。本研究では、こうした「政治的なもの」の探求は、それ自体が重要な研究課題となりうることを明らかにするとともに、「政治的なもの」を探求する理論について、その学問的基盤が必ずしも十分に展開されていない点を指摘し、改善の方策を探った。

研究成果の概要(英文)：The concept of "the political," as distinguished from a more conventional notion of "politics," was once frequently discussed in political theory. However, the attention to the concept of "the political" has been decreasing since the 2000s. Is the concept of "the political" no longer useful in political theory? This study attempted to reveal the relevance and importance of political theory of "the political." In so doing, this study re-examined the works of political theory on "the political" and compare them with other approaches in political theory (philosophy). As a result, this study revealed two points. First, "the political" remains a useful concept in finding and elucidating the dynamism in and around politics. Second, political theory of "the political" needs to address the legitimacy of their own theoretical activities.

研究分野：政治理論、政治思想史

キーワード：政治的なもの 政治理論 シェルドン・ウォーリン ハンナ・アーレント 闘技デモクラシー論 大陸系政治哲学

1. 研究開始当初の背景

(1) 「政治」と区別された「政治的なもの」という概念は、かつて政治理論で頻繁に論じられてきた。ここで「政治的なもの」とは、従来の政治学が扱ってきた選挙や議会などの「政治」に収まらず、時にはこうした狭義の「政治」によって隠蔽されてしまうような次元を指す。政治理論研究者は、狭義の「政治」を越えた「政治的なもの」を対象とすることで、前者を探求する政治科学 (political science) や、前者における分配的正義等の構想に注力した規範的政治理論を批判したのである。例えば、「政治的なもの」の諸構想の歴史として政治思想史を描いたウォーリンの先駆的著作 (2004(1960)=2007) や、利害調整にとどまらない、政治の敵対的側面を強調したムフ (1993=1998) などが挙げられる。だが、2000年代以降、「政治的なもの」をめぐる議論は政治学・政治理論への異議申し立てにとどまるという理解が広まり、その射程や重要性が十分に分節化されてこなかった。

(2) このような「政治的なもの」への関心低下を、政治理論のアプローチおよび対象の2点から整理すると以下のようなになる。まず、政治理論へのアプローチという面からみれば、しばしば大陸哲学系の知見を背景とする「政治的なもの」の政治理論に対し、英米系の分析哲学の手法に基づく分析的な政治哲学が日本語圏でも大きな躍進を遂げ、現在も活発に研究が進められるに至った。また、政治理論の対象の観点からみると、「政治的なもの」にかえて、近年は「社会的なもの」に注目が集まることになった。「政治的なもの」の理論について、しばしば、政治の根源的、純粋な姿にこだわるあまり、90年代以降より切迫してきた経済格差や移民といった問題を扱っていないのではないかという批判がなされるとともに、「社会的なもの」として、社会的包摂や排除、経済的格差の問題が論じられることが増えていったのである。

(3) では、「政治的なもの」の政治理論はその歴史的使命を終えたのだろうか。実際には、「政治的なもの」の理論を担った理論形は現在でも活動を継続しており、かつ、かれらの活動は異議申し立てに留まるものではない。それゆえ、「政治的なもの」の政治理論の可能性を今一度検討し、発展させていくことが必要だと思われる。

2. 研究の目的

上で述べたように、本研究の最終的な目的は「政治的なもの」の政治理論の可能性を探ることにある。具体的には、以下の3点について明らかにすることを目的とした。

(1) 「政治的なもの」の政治理論は何を目指していたか：「政治的なもの」に関する政治理論は、何を問題にし、どのような議論を展開していたのか。また、それらの問題や議論のうち、受け継がれなかったものや、あるいは行き詰まったものはあるのか。あるとしたら、その理由は何か。

(2) 有力な対抗潮流、とりわけ、分析的な政治哲学および、「社会的なもの」の理論との比較検討：現在の有力な政治理論の潮流は、どのような理由で「政治的なもの」の理論を批判しているか。そうした批判は妥当か。妥当だとすれば、「政治的なもの」の政治理論には、どのような応答が可能か。

(3) 「政治的なものの政治理論」のアクチュアリティ：現在および今後、「政治的なものの政治理論」はどのように発展していくことができるか。

3. 研究の方法

上記「研究の目的」で挙げた3点について、それぞれ下記のような方法で検討した。なお、いずれの検討においても、テキスト解釈と概念の分析という、政治理論の標準的な方法を用いた。

(1) まず、「政治的なもの」の政治理論が何をを目指していたかを明らかにするため、過去の「政治的なもの」の政治理論の著作を検討する。本研究で中心的に扱ったのはシェルドン・ウォーリンであるが、他の理論家や、あるいは「政治的なもの」の理論に影響を与えたフリードリヒ・ニーチェやハンナ・アーレント等の政治思想についても検討した。

(2) 次に、有力な対抗潮流との比較検討を行うため、分析的な政治哲学、「社会的なもの」の政治理論の双方について、「政治的なもの」の政治理論との比較検討を行った。

(3) 最後に、(1)(2)の成果をもとにして、また、「政治的なもの」の理論家の近年の動向を追いつつ、「政治的なもの」の政治理論の進みうる方向を検討した。

4. 研究成果

上記(1)～(3)の課題について、それぞれ得られた成果について記す。なお、ひとつの研究業績において、複数の目的を追求したものについては、重複して記述している。また、類似の成果が得られた業績が複数あった場合、代表的なもののみ言及するにとどまる。

(1) 「政治的なもの」の政治理論が過去に目指していたものを明らかにするため、乙部(2020b)では、ウォーリンの取り組みを、マックス・ウェーバーの政治概念との比較を通じて検討した。その結果明らかとなったのは、ウォーリンの著作に一貫する、政治理論の存在意義、つまり、政治理論の正統性への問題関心である。後にも述べるように、これはウォーリン以外の「政治的なもの」の論者には必ずしも共有されてこなかった論点であるが、現代の状況に照らすと重要な問題関心であるといえる。

また、「政治的なもの」の理論に影響を及ぼしたり、その背景となった思想家についても検討した。乙部(2020a)では、「政治的なもの」の政治理論に多大な影響を与えたアーレントの政治思想について、経験的政治学との比較から、その著作の性格と役割の解明を試みた。結果明らかとなったのは、過去の哲学的、思想的古典に依拠しつつも、それらの古典的著作の解釈を刷新し続ける中で、経験・規範の二分法も乗り越えて政治について論じるという独自のスタイルである。そして、こうしたスタイルは、ひとりアーレントに限られるものではなく、「政治的なもの」の理論家を中心とした後世の政治理論家にも受け継がれているのである。加えて、乙部(2019a)では、同じく「政治的なもの」の理論に大きな影響を与えたアイザイア・バーリンに関する研究書の書評論文として、バーリンの価値多元主義が、「政治的なもの」の理論に呼応しつつ、かつ、多様な方向性を許容していることを明らかにした。

加えて、乙部(2021b, 2021c)では、「政治的なもの」の理論家が好んで言及するニーチェと、「政治的なもの」の理論と呼応しつつ独自の政治思想を提示したりチャード・ローティの政治思想について概観した。そこで明らかになったのは、「政治的なもの」の追求が取りうる多様なあり方である。

(2) 対抗潮流との比較では、まず、「政治的なもの」の理論に占める大陸系哲学の影響を重視した上で、分析的政治哲学との比較検討を行った。乙部(2017a)では、両者の比較の上、「政治的なもの」の政治理論において、政治の動態への着目が際立っていること、しかしながら、学問的言説の正しさや公共性への視座が分析的政治哲学に比して不足してきたことを明らかにした。また、乙部(2017b)では、にもかかわらず、両者に一定の共通性が存在することを明らかにした。

次に「社会的なもの」への問題関心との比較を、乙部(2018)において行った。ここでは、「政治的なもの」への関心が、(より重要な)「社会的なもの」への問題関心を妨げたという批判を取り上げ、それが妥当なものであるかを検討した。その結果明らかとなったのは、必ずしもこのような批判はあてはまるといえず、むしろ、「政治的なもの」の理論には、政治の動態の発見と把握という重要かつ固有の意義が存在するという点である。

(3) これらの研究を踏まえて、最後に、「政治的なもの」の政治理論が現在、そして未来に有するアクチュアリティが浮かび上がった。第一に、政治の動態を発見、把握するという役割である。これは、通常「政治的なもの」の政治理論に帰される「異議申し立て」や「闘技」と重なりつつも、必ずしもそれらに解消されえず、かつ、その重要性を決して失っていない要素である。乙部(2019b)では、「エートスの陶冶」という、「政治的なもの」の理論において重視されてきた要素を詳しく追跡することで、この点を明らかにした。すなわち、「闘技」という政治的な行為と密接に結び付けられて理解される「エートスの陶冶」には、しかしながら、政治の動態に対する観察者の態度を示唆する要素が含まれているのである。また、Otohe(2020)では、政治の動態を発見、把握するという理論の役割について、「ドラマ化」という観点から分節化して提起した。

第二に、本研究課題を遂行する中で、政治理論の存在意義や正統性という論点が、「政治的なもの」の理論において必ずしも明示的に追求されてこなかったという問題が浮かび上がってきた。つまり、「政治理論が提示する知はいかなる根拠や妥当性を有するのか」という問題である。この問題は、先に挙げた乙部(2020b)で示したように、ウォーリンなどの著作に見いだされるものの、必ずしも広範に共有、追求されてきたとは言いがたい。とはいえ、この問題についても、「政治的なもの」に関する過去の著作の検討を通じて手がかりが得られる。たとえば、先にも触れたように、乙部(2020a)では、アーレントの著作とその受容の分析を通じて、古典をひとつの参照点とするという、妥当性の追求の仕方を明らかにした。この点については、乙部(2021c)においても、分析的政治哲学や、文脈主義的な政治思想史研究との対比を通じて示している。とはいえ、古典のみが妥当性担保に十分という問題はなお残される(古典の新奇な解釈はいかにして妥当性を得るのか、また、古典に参照点を求めることは、非西洋圏の思想や、いわゆる「正典」外の思想や問題を過小評価することにならないか、等の問題が即座に思い浮かぶ)。今後の課題

としたい。

参考文献

Mouffe, Chantal. 1993. *Return of the Political*. Verso (千葉真ほか訳『政治的なものの再興』日本経済評論社, 1998).

Wolin, Sheldon. 2004 (1960). *Politics and Vision*. Expanded edition. Princeton University Press (尾形典男, 福田歓一ほか訳『政治とビジョン』福村出版, 2007).

研究業績（本報告書内で言及したもののみ）

乙部延剛. 2017a. 「対抗する諸政治哲学」『ニクス NYX』 4: 204-219.

乙部延剛. 2017b. 「政治哲学の地平」『現代思想』 45 (21): 283-293.

乙部延剛. 2018. 「<政治的なもの>から<社会的なもの>へ？——<政治的なもの>の政治理論に何が可能か」松本卓也、山本圭編『つながり>の現代思想 明石書店.

乙部延剛. 2019a. 「価値多元論の政治学：森達也『思想の政治学：アイザイア・バーリン研究』をめぐって」『政治哲学』 25: 78-90.

乙部延剛. 2019b. 「エートスの陶冶とは何か？」『年報政治学』 2019-11: 36-57.

乙部延剛. 2020a. 「政治学：アーレントと政治理論」日本アーレント研究会編『アーレント読本』法政大学出版局.

乙部延剛. 2020b. 「政治理論、政治哲学とマックス・ウェーバー」『現代思想』 48 (17): 101-110.

乙部延剛. 2021a. 「政治思想の方法」野口雅弘, 山本圭, 高山裕二編『よくわかる政治思想』ミネルヴァ書房

乙部延剛. 2021b. 「ニーチェ」野口雅弘, 山本圭, 高山裕二編『よくわかる政治思想』ミネルヴァ書房

乙部延剛. 2021c. 「ローティ」野口雅弘, 山本圭, 高山裕二編『よくわかる政治思想』ミネルヴァ書房

Otobe, Nobutaka. 2020. *Stupidity in Politics*. Routledge.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 乙部延剛	4. 巻 48(17)
2. 論文標題 政治理論、政治哲学とマックス・ウェーバー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 101-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 乙部延剛	4. 巻 2019-11
2. 論文標題 エートスの陶冶とは何か？	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 年報政治学	6. 最初と最後の頁 36-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 乙部延剛	4. 巻 25
2. 論文標題 価値多元論の政治学：森達也『思想の政治学：アイザイア・バーリン研究』をめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 政治哲学	6. 最初と最後の頁 78-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 乙部延剛	4. 巻 4
2. 論文標題 対抗する諸政治哲学：分析的政治哲学と大陸的政治哲学を中心に	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 ニュクス	6. 最初と最後の頁 204-219
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 乙部延剛	4. 巻 45
2. 論文標題 政治哲学の地平：分析的な政治哲学と大陸的政治哲学の交錯	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 283-293
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 Nobutaka Otobe
2. 発表標題 Cliches as a Political Problem
3. 学会等名 ECPR General Conference (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Nobutaka Otobe
2. 発表標題 System and Machine: Turns to Macro-Scale Analyses in Contemporary Democratic Theories
3. 学会等名 IPSA 25th World Congress of Political Science (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 乙部延剛
2. 発表標題 <政治的なもの>とデモクラシー
3. 学会等名 日本政治学会 研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Nobutaka OTOBE
2. 発表標題 Ecological Metaphors of the Political: Reconsidering the Imagery of Ship and Island in Political Theory"
3. 学会等名 American Studies Institute, Seoul National University (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 Nobutaka Otobe	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Stupidity in Politics: Its Unavoidability and Potential	5. 総ページ数 199
3. 書名 Routledge	

1. 著者名 荒木雅也、石井智弥、伊藤純子、井上拓也、今川奈緒、乙部延剛、川島佑介、鈴木俊晴、陶山二郎、高橋大輔、土屋和子、富塚祥夫、古屋等、谷田部博貴	4. 発行年 2019年
2. 出版社 尚学社	5. 総ページ数 342 (担当14-24)
3. 書名 エレメンタリー法学・行政学-教養から専門へ	

1. 著者名 野口雅弘、高山裕二、山本圭編 (乙部延剛、近藤和貴、隠岐 須賀 麻衣、稲村 一隆ほか)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 216
3. 書名 よくわかる政治思想	

1. 著者名 三浦隆宏、木村史人、渡名喜庸哲、百木漠、乙部延剛、ほか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 390 (担当249-257)
3. 書名 アーレント読本	

1. 著者名 松本卓也、山本圭、淵田仁、大久保歩、柿並良佑、比嘉徹徳、信友建志、乙部延剛	4. 発行年 2018年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 272
3. 書名 つながり の現代思想 社会的紐帯をめぐる哲学・政治・精神分析	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------